

世界遺産「平泉」の拡張のための 類似資産調査（2）

－チベット「ラサのポタラ宮と歴史的遺跡群」－

佐藤嘉広^{※1} 鈴木弘太^{※2}

1 調査の趣旨

「平泉の文化遺産」の「拡張」による追加登録を進めていくにあたって、「平泉」と類似する性格を有する資産との比較を行うことによって、そのもつ顕著な普遍的価値を検討することは極めて重要である。2010年に提出した「平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群－」の推薦書においては、比較分析の対象を庭園と仏堂にほぼ限定したことから、政治・行政上の拠点としての「平泉」、あるいは仏教的理想世界としての「平泉」と、東アジアを中心して所在する類似資産との比較が十分に行われたわけではなかった。そのことが一因となったためか、推薦した6箇所の資産のうち、奥州藤原氏の政治権力の中心である柳之御所遺跡については、「どのように人類の価値観の交流に貢献しているか明らかでない」とされ、記載資産から除外された。

岩手県及び関係市町においては、今後、拡張のための新たな推薦書の作成を進めるにあたり、「仏教に基づいて形成された理想的拠点（都市・都城）」の視点から「平泉」と他資産との比較分析を進めることとし、調査計画を策定した。

表1 平成29年度（2017）までの類似資産の調査計画

	平成25年度 (2013)	平成26年度 (2014)	平成27年度 (2015)	平成28年度 (2016)	平成29年度 (2017)
海外	ラサのポタラ宮と 歴史的建造物群 (中国)	上都 上京竜泉府 (中国)	スコタイ／アユ タヤ (タイ)	シギリヤ／アヌ ラーダブラ (スリランカ)	慶州／扶余 (韓国)
日本国内	鳥羽ほか (京都市)	鎌倉ほか (鎌倉市ほか)	那覇・首里 (那覇市ほか)	山口ほか (山口市ほか)	未定

※調査先は今後のOUVの検討内容を反映させて変更する場合がある。

平成25年度については、チベットにおける政治と宗教の拠点都市であるラサのポタラ宮と歴史的建造物群（中国ラサ市、Historic Ensemble of the Potala Palace, Lhasa, 1994年記載、2000年・2001年拡張）を調査の対象とし、現地に平成25年8月22日から26日まで滞在した。調査は、

※1 岩手県教育委員会世界遺産担当主任主査、岩手大学平泉文化研究センター客員教授

※2 一関市教育委員会学芸員

岩手大学平泉文化研究センター及び岩手県立大学と共同で実施した。

2 参加者及び調査日程等

調査参加者は以下のとおり。

岩手県教育委員会主任主査 佐藤嘉広

一関市教育委員会学芸員 鈴木弘太

岩手大学平泉文化研究センター教授 伊藤博幸

岩手県立大学短期大学部教授 誉田慶信

調査日程は表2のとおりである。

表2 ラサのポタラ宮と歴史的建造物群の調査日程

月 日	調 査 視 察 行 程	宿 泊 地
8月20日	羽田空港発、西寧着。	西寧
8月21日	西寧タール寺調査、西寧発（チベット鉄道）	車中泊
8月22日	ラサ市着、旧市街地・小昭寺視察	ラサ
8月23日	ポタラ宮・大昭寺・ノルプリンカ・八廓街調査	ラサ
8月24日	ギャンツェ着、パラ荘園調査	ギャンツェ
8月25日	ルカン寺・柳公園調査、ラサ市西藏博物館視察	ラサ
8月26日	ラサ空港発、成都着。武侯祠博物館視察	成都
8月27日	成都空港発、成田空港着。	

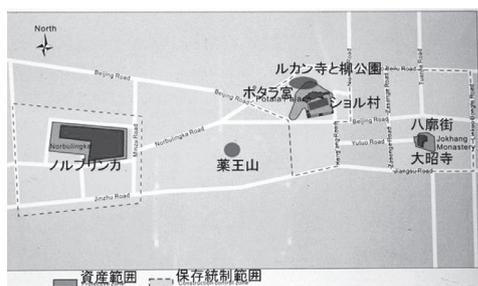
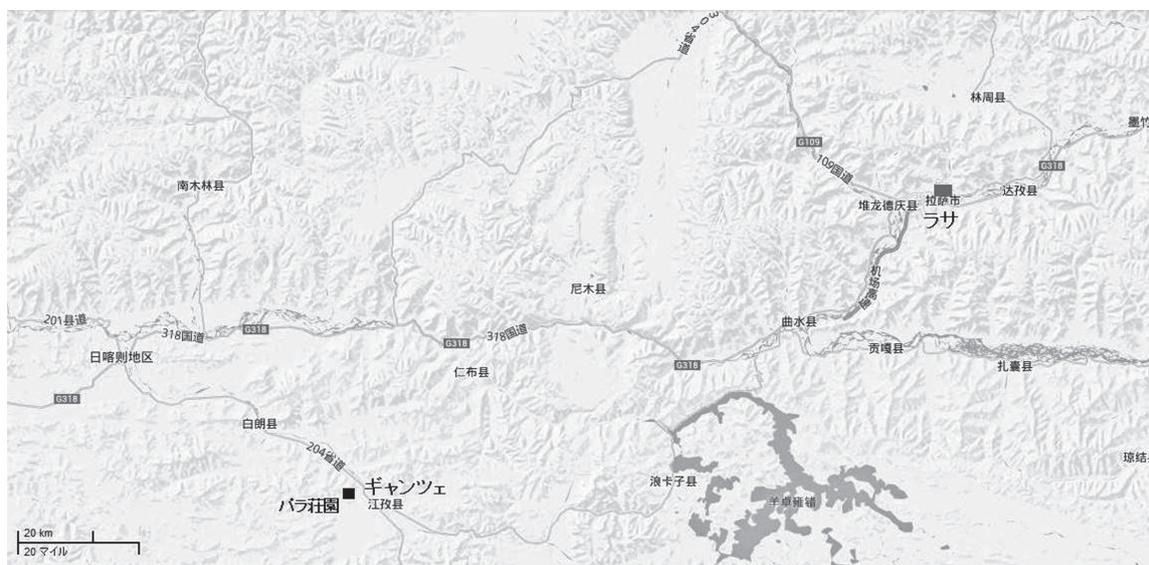


図1 ラサ及びギャンツェ（パラ荘園）の位置（上）(google mapより作成)

図2 ラサのポタラ宮及び関連資産の位置（左）(ユネスコウェブサイト地図 Chart of location relationship of Norbulinka and Jokhang Monastery with the Potala Palace より作成)

3 ラサの歴史及び世界遺産としての評価

(1) 歴史

ラサは、チベット仏教の中心地で、吐蕃の時代を含めると7世紀からほぼ1300年間政治・行政及び宗教の拠点として発展した。

吐蕃は、ソンツエンガムボ (SongtsänGamp) 王 (581-649) とその二人の王妃によって創始され、ラサを都とした。王妃のうち、唐から迎えられた文成公主は、持参した釈迦牟尼像を本尊とし、大昭寺 (ジョカン、Jokhang Temple Monastery) を建立した。8世紀に、仏教は国教となり、唐との国境の画定も行われた。その後、ダルマ (Langdarm) 王 (841-846) は仏教を弾圧したが、その死後後継者争いが生じ、王家は衰微した。11世紀には再び仏教が復興する。以後、仏教は各地の氏族と結びついて、さまざまなチベット仏教の宗派が形成された。観音菩薩は、それぞれの宗派の祖師の化身として信じられた。

1642年、主要な宗派のひとつゲルク派 (Gelug-pa) が中央チベットを制圧すると、ダライラマ (Dalai Lama) 5世は自らを観音菩薩やソンツエンガムボ王になぞらえ、頻繁に観音儀礼を主催し、ポタラ宮 (白宮) の築造を開始した。この宮殿が建てられた独立小丘である紅丘 (Red Hill) は、太古に観音菩薩がチベットを見守るために造られ、その後、ソンツエンガムボ王が宮殿を営んだとされる地であった。ダライラマ5世の死後、その摂政であったサンゲギャムツォ (SangyeGyatso) は紅宮を完成させた。

清朝は、ダライラマ6世を廃して7世を即位させるが、文化的には相互に影響を与えていた。1755年に、ダライラマ7世は夏の離宮としてノル布林カ (Norbulingka) を建立し、夏期における政務の場所とした。

20世紀にはいり、1904年のラサ条約において通商の優先権がイギリスに認められた。1913年、ダライラマ13世はチベットの独立を宣言するが、中国はその条約を批准しなかった。1959年、ダライラマ14世はインドに亡命し、現在は中国チベット自治区 (ラサ市) として統治されている。

(2) ICOMOS による評価

「ラサのポタラ宮と建造物群」は、1994年に「ラサのポタラ宮」(The Potala Palace, Lhasa) として登録された後、2000年に大昭寺が、2001年にノル布林カが拡張により追加されている。これらの概要はユネスコ世界遺産センターのサイトで知ることができるものの、締約国からユネスコへ提出された推薦書は未公表で、以下は、ICOMOS 勧告によって知りうる内容である。

【1994年の勧告】

締約国である中国は、当初の推薦にあたり評価基準を以下のように適用している。

i) ポタラ宮は紅宮と白宮及びそれらに付属する建物群で構成される。それらは異なる時期に建てられているものの、丘の斜面の道に沿って相互によく統合されている。したがって、それは類い稀な美的成果であり、建築の傑作である。

ii) ポタラ宮の質は、その全体的な建築のみにあるのではなく、その構造物を特徴づける設計と芸術的装飾 (彫刻、絵画) にもある。

iv) ポタラ宮は、寺院と宮殿が統合された注目すべき建築である。この観点において、中国はもと

より世界全体でも稀である。

政治と宗教が結合したチベットにおけるかつての中心として、歴史の重要な場面と密接に関係していることから、ポタラ宮は歴史的に、思想的に、宗教的に極めて重要である。

これに対し、ICOMOS 勧告（1994）においては、基準（ii）を認めず、代わって基準（vi）を認めている。

（i）ポタラ宮は、その設計と装飾において、そして印象的な景観との調和的設定において、人間の想像性と創造性の顕著な作品である。

（iv）ポタラ宮の規模と芸術的財産は、チベット建築の頂点を示し、現代世界における最後の現存の神権建築の顕著な事例である。

（vi）ポタラ宮は、世俗と宗教の権威がひとつの実体へ統合された力強い類い稀な象徴である。

また、この勧告において、ポタラ宮が大昭寺及びラサ市全体と精神的にまた歴史的に不可分であるとして、それらの全体（特に、ショル村（historic village of Shöl）、ルカン寺と柳公園（Lukhang Temple and its willow park）、薬王山（Chakpori Hill）に資産を拡張すべきである旨が付言されている。

【2000年の勧告】

大昭寺の拡張に係る2000年の勧告において、推薦書中で拡張のための評価基準の適用は示されていない。勧告では以下のように結論付けられている。

【質】

大昭寺は世界におけるもっとも重要な仏教建造物のひとつである。その建築と構成は中国、インド及びネパールからの影響を受けたチベット様式の顕著な事例である。

【比較分析】

大昭寺をこの地域の他の宗教建造物を比較することは意味がない。なぜなら、その重要性は他のどんな本来的な質よりもポタラ宮との関係に存在するものであるから。

【2001年の勧告】

【質】

ノル布林カの宮殿と庭園は、後世に建てられたものであり、機能が追加されたと考えられるものであるにもかかわらず、ポタラ宮と緊密に結びついている。それは、ダライラマの夏（好適期）の住居となつて、高地の厳しい天候にとってのオアシスであった。その建設には設計と実施の高い質が表現され、完全な庭園構成となっている。この場所は、宗教的及び政治的課題にも密接に結びつき、瞑想の場所であるとともに政治的な協定の場所でもあった。

【評価基準】

(i)、(iv)、(vi) を保持。

[将来への勧告]

ポタラ宮は精神的・歴史的に大昭寺及び聖なるラサ市全体と不可分であり、全体を拡張して資産に含めることを検討すべきである。

イコモスは資産名称を再検討し、「ラサのポタラ宮と歴史的建造物群」とすることを勧告する。

4 個別調査資産の概要

(1) ポタラ宮

ポタラ宮は、チベット仏教のひとつの特徴である「円環都市」(round city) の概念に基づいて設計されている。

ポタラ宮は、ダライラマ 5 世により、デプン寺 (Drepung) とセラ寺 (Sera) の中間に位置する政治的な理想郷として創建された王宮で、当初は政治・行政の中心である「白宮 (ポタン・カルポ, White Palace)」が建設された。ダライラマ 5 世の死後に宗教の中心地となる「紅宮 (ポタン・マルポ, Red Palace)」が建設され、歴代のダライラマの霊廟となっている。

ポタラ宮は、吐蕃王朝時代に第 33 代のソツエンガムボが 637 年に紅丘 (マルポ・リの丘, Red Hill) に築いた宮殿の遺跡を、ダライラマ 5 世が増補拡充したともいわれ、東西 400 メートル、南北 350 メートル、13 階建てで基部からの総高 117 メートル、建築面積にして 1 万 3000m²といわれ、千を超える部屋、万を超える祭壇、そして 20 万の造像があり、世界最大規模の建築物である。ポタラ宮が築かれた紅丘は、薬王山の金剛神、Pongwari の文殊菩薩とともに 3 つのチベットの守護のひとつで、観音菩薩を表している。

ポタラ宮には数多くの壁画が描かれ、その数は何万にも及ぶといわれる。壁画の題材も幅広く、歴史的事象や経典、神話、建築、そして日常生活などに関する物語がみられる。また、タンカ (絹・布・紙への絵画、織られたり、刺繍によるものもある) も大きな特徴で、全部で 1 万点が納められている。壁画と同様に、タンカもまた画題は変化に富んでいる。さらに、インド、ネパール、カシミールなどからもたらされた石、木、粘土、金属それぞれに重要な彫刻が施されている。それらは数ミリのごく小さなものから 10 メートルを超えるものまであり、それらの多くはメッキが施されている。そのほか、仏教経典や歴史文書、財宝の類は数限りない。

白宮は、17 世紀中頃 (1649 年) に建設され、チベットの政治・行政の中心として機能し、20 世紀前半までその規模を拡大し続けた歴代ダライラマの居所でもある。日光殿と呼ばれるダライラマの居室は白宮最上層にあり、会議室、謁見室、瞑想室などが併設される。上層には、坐床式や親政大典等の祭礼に利用された、建築面積 717m²の東大殿 (25.8 メートル× 27.8 メートル、ツォム・チェンシャル, the Old Audience Hall) がある。

紅宮はダライラマ 5 世の死後 (1682 年)、約 10 年をかけて建造された。当初はダライラマ 5 世の霊廟及び経典の保管を目的として建設されたが、その後代々のダライラマの霊廟として用いられた。数多くの仏堂と霊塔が作られている。その大きさと数多くのメッキされた霊塔は、白宮と調和的に融合し、全体として、ポタラ宮に荘重さを付加している。下層には大集会場があり、それに併設して 5 世の霊塔を頂点とした、歴代の霊塔が建てられている。(6 世のものはない)。紅宮の西側にはダライラマの持仏堂がある。

紅宮の完成により、ポタラ宮は宮殿、仏堂、霊塔（廟）の広大な複合体となった。

なお、山頂にある瞑想のための法王洞（Sutra and Dharma Hall）と、超凡仏殿（Lokeshvara Chapel）は、いずれも時代的に先行するものであるが、ポタラ宮に調和的に組み込まれている。

（2）大昭寺

大昭寺は、7世紀（647年）、チベットの首都をラサに移したソンツェンガムボ32世によって創建された。本尊は釈迦牟尼。この寺院は、文成公主が釈迦牟尼像を運んだ車を湖そばの泥地に沈めたとされる場所に建立されたもので、そこは、悪影響から免れるための場所であったと伝えられる。

境内域が2.5ヘクタール、ラサ旧市街の中心に位置する。ジョカンには、入口、広場、仏堂があり、僧侶の住房と貯蔵庫に四方を囲まれている。建物は、木造及び石造である。壁は石で構築され、それらにはチベット様式の黒窓枠がはめられている。

ポーチは少し離れて配置されていて、外側の中庭を広く形成している。右側はマニ車が配置された単層の建物であり、その建物の後ろには、四天王が描かれた巨大な壁画がある。

入口のアーチの下に二つの扉があり、その扉の間に通路がある。片側は四天王の像である。ポーチは、幅32メートル、奥行39.3メートルの庭につながる。それは回廊に囲まれ、その壁には多くの仏像が描かれている（一万体ブツダ回廊）。回廊は、多くの正方形の木柱により支えられていて、柱は先端が徐々に細くなり、礎石建ちである。柱、梁、垂木、天井は赤く塗られ、青、緑、金で描かれた植物で飾られている。

この庭は、寺院をもっとも特徴づける仏堂に面している。仏堂は4層で、東西97メートル、南北82.5メートルである。

当初からの建築物は、四方に規則的に配されている。入口に面した側の中心には、阿弥陀と弥勒を両脇に伴った釈迦堂がある。これらの仏堂と、低層にあるその他の大型の仏堂については、それらの構造様式はチベットと漢の伝統が融合しているが、一方で、動物と獅子が彫られた着色された装飾の内部回廊の庇は、ネパールとインドの特色を持っている。

後世に作られた3層と4層の屋根は、メッキされた銅の瓦が葺かれている。中央とそれぞれの棟の端部は塔の形に彫られてメッキ装飾されている。庇の下には漢の様式の控え壁（buttress）がある。釈迦堂の屋根は類い稀な丁寧な調整が施され、棟の装飾は、チベットと漢の両方の影響を示している。

寺院には、様々な素材で長い期間にわたって作られた、3,299の仏像、神像、菩薩像、護法像、歴史図像が、他の宝物や文書とともにおさめられている。それぞれの仏堂の壁は、宗教的・歴史的な場面を描いた、高い質の壁画によって覆われている。

（3）ノル布林カ（羅布林卡）

ノル布林カ（宝の庭園の意）は、ポタラ宮の西約3キロの地点に位置する。健康に問題があったと伝えられるダライラマ7世の治療のため、清朝の支援を得て18世紀中ごろに建造され、以後、ラサにおける政治・宗教・文化のもうひとつの中心となり、ダライラマの夏の離宮として用いられた。夏季はここで政務が行われた。

園内には歴代のダライラマがそれぞれの建物を建造した。園内は、5つの区域に分けられ、36ヘクタールの面積を有する。1755年に建てられたダライラマ7世の離宮ケルサン宮（Gesang Palace）は、チベット様式の2階建てで、仏教信仰などの部屋をもっている。ケルサン宮を構成するコムソム・セロン（KomsomSelon）には、ダライラマがオペラを鑑賞した金色の屋根がある。2

つ目はソジェ宮 (Tsoje Palace) に関する一群で、湖の3つの島に、湖心宮 (Place in the Lake) と竜王宮 (Dragon Place) などを有し、3つ目の群であるジェンセン宮 (Jensen Palace) とともに北京の影響を受けている。ジェンセン宮には、ポタラ宮 (白宮) と同一の彫刻がみられる。4つ目が以前のチベット政府の役所であるシャブチョウ僧院 (Shabucho Monastery) である。5番目のダライラマ14世の住居として1954年に建てられた「タクテン・ポタン」(新宮、TagtanMigyur Palace) は、二階建ての豪華な建物で、当時の家具やロシアから送られたラジオ、インド首相から贈られたレコードプレーヤーなど近代的な資料も残されている。他には、付属する図書館、博物館、動物園などがある。

(4) パラ荘園 (Pala Manor, 帕拉庄園)

パラ荘園はダライラマ7世の時代に、ブータンより亡命した貴族、パラ氏によりギャンツェ (Gyangtse) に展開した荘園である。パラ氏の子孫は、ダライラマの側近に登用されている。

ギャンツェはラサ市より南東約150 kmに位置するチベット地方の穀倉地帯である。農奴開放以前、パラ一族はギャンツェを中心として、37の荘園と12の農場、30,000を越す土地と14,900頭を越す家畜、3,000人を越す農奴をもっていたとされる。パラ荘園はチベットの中で、もっとも荘園の景観を良く残しているといわれている。現在は荘園の中心的な建物が残され、中華人民共和国の重要文物として保存公開されている。この建物は、82部屋をもつ3階建てで、5,000㎡の規模である。

パラ氏はブータンのチベット族の首長であったが、ブータンの内乱時にチベットに亡命し、チベット地方政府の役人に登用された。1904年のイギリス軍のチベット侵攻から1959年まで、一族は近隣の村に移動した。そのため、パラ荘園もイギリス軍によって破壊されたが、息子たちの時期に拡大し、現在残されている荘園が形作られた。彼の長男 (ToptanYontan-Gonchok) は、ラサ市でダライラマの秘書を務め、次男 (Para Wangju) 及び三男 (Wangdor) は地方政府の役人となった。その後も荘園経営は続き、そのため、ポタラ宮及びラサ市に対する食糧供給を通じた、重要な経済基盤となっていた。

(5) ルカン寺、シオル村、薬王山、八廓街、等

1994年の決議において「拡張」して保護されるべきことが示唆されていたのは、のちに世界遺産に追加された大昭寺とノル布林カではなく、ルカン寺と柳公園、シオル村、薬王山であった。

ルカン寺は、ポタラ宮の北側に位置する小規模な寺院で、東側に園池が付随する柳公園を伴っている。ダライラマ6世による17世紀の創建とされているが、その起源はダライラマ5世によるポタラ宮の造営期まで遡り、園池は、ポタラ宮造営の際の土取り跡をそのまま利用し水を蓄えたといわれ、5世の死後、後継となった摂政サンゲ・ギャンツォによって完成された。

6世は、ポタラ宮よりも後背の園林における弓や詩作を好み、そこを瞑想の場とした結果、ルカン寺のある隔離された柳の垂れ下がる中島は理想的の聖域となった。最上階には、ダライラマの秘密の小部屋があり、その部屋にはごく限られた人のみ見ることのできる優れた壁画が描かれている。ルカン寺は、チベット、中国、そしてモンゴルの要素を結合した建築物である。

1994年のポタラ宮登録後、ほどなく近代的な公園として整備が進められ、現在では、わずかにルカン寺のみ歴史的風情を残している。

シヨル村は、ポタラ宮の南側前面に位置していた要塞化した町もしくは集落であった。長方形で、南側の主たる入口ほか三方に入口を有していた。住居、宗教施設、監獄、行政施設、家畜小屋、法廷、宝物庫、印刷所、酒場、穀倉などを含め重要な歴史的建造物が残されていたが、世界遺産登録後の1995年に村としての機能を停止した。

薬王山は、ポタラ宮の南西約1キロに所在する独立丘で、平坦部からの比高は約80メートル。文成公主が唐に向かって礼拝したと伝えられる山の南東側の岩陰には数多くの仏像や神像が彫刻されている。北側の山裾には湧水地があり、「聖水」が湧き出していた。17世紀中ごろ、山頂に寺院が建立された。その寺院にはチベットの薬王像が安置されていたが、伝説によれば、その薬王は釈迦の化身で、どのような病気も治療することができることされている。ダライラマ5世の時代には、チベット各地から医術を学ぶ人々が集まった結果、医学校が建設され、この地がチベット医学の中心となっていた。

八角（廓）街（パルコル、bar-kor）は、大昭寺を中心とするラサの巡礼路のひとつで、大昭寺の本尊釈迦を巡礼するナンコル（nan-kor）の外側にあたり、3重の巡礼路の中間に位置するものである。1周約1キロ。現在はなかば観光地化が進んでいるが、チベットの旧市街をもっともよく残している景観であると言われている。巡礼者は時計回りに巡礼し、多くの観光客も同様である。宗教都市としてのラサは、これらの巡礼路を中心に発展してきた。

以上の地区は、現在ではとくに世界遺産の拡張への取組は進められていないが、一方で、保存管理についてはしばしばイコモス及び世界遺産委員会から改善事項が指摘されてきている。

5 ラサとの比較における「平泉の文化遺産」

(1) 都市設計

平泉とラサの都市設計について比較する。両者はいずれも仏教を強力に反映して都市が形成されている。

平泉は、仏教のなかでも特に浄土思想が反映されて設計されたと考えられている。平泉においては、奥州藤原氏によって、まず11世紀末に居館である平泉館（柳之御所遺跡）が設置され、平泉の政治・行政上の拠点施設として機能した。館の位置は、河川交通の要衝と目される北上川に接した丘陵端部に選定された。奥州藤原氏がなぜ平泉を拠点に定めたのかについては明確ではないが、初代清衡の母方の故地が衣川を挟んで北に隣接し、白河～外が浜に至る奥羽の中心に位置することは事実として挙げられる。

館の設置後、その北西丘陵に中尊寺が造営される。中尊寺諸堂の中で、1124年に完成した阿弥陀堂である金色堂は、「その正方に館が構えられている」と『吾妻鏡』に記述されることから、平泉館との関係が意識され、両者の位置関係に浄土思想が反映されていると解釈されている。その傍証として、この両者が道で結ばれていたことが明らかとなっている。その後、金色堂には歴代の奥州藤原氏の当主が葬られ、霊廟としての性格を併せ持つこととなった。

12世紀の第2四半期以降、平泉の西に位置する円錐形の独立小丘陵金鶏山が、都市設計の基点となったと考えられている（柳之御所遺跡調査事務所2008）。山頂には経塚が継続して造営され、そ

こから真南の軸線上に毛越寺の東辺があたっているほか、真東の軸線上では、無量光院、猫間が淵を經由して平泉館に至る通路状の遺構が確認され、さらに延長上の館内の園池には、同一軸線上に橋が渡されている。

12世紀第4四半期ごろの造営と考えられる無量光院は、平泉館の「南」に位置し、東門から西側を望んだ場合、前面の園池、東小島、本堂の阿弥陀堂、そして背後の金鷄山という構図で配置されている。完全な東西軸ではなく、10～20度程度振れているが、これは、都市平泉の地割が正方位のものと同程度振れるものがあることと対応している。この2種類の軸方向は、鎮守社のひとつと考えられる白山社で交差している（佐藤 2013）。

一方、ラサにおける都市設計の起点は、大昭寺である。都市ラサは、大昭寺を中心に3重の巡礼路が発達した。そのもっとも内側のものはナンコルと呼ばれ、大昭寺の本尊である釈迦如来仏像の周囲を巡回するものであり、都市ラサを形成するというよりは、寺院の構造に関わるといえるものである。

その外側が、大昭寺の外周を巡るパルコルである。ラサにおいて大昭寺に次いで重要な位置を占めている小昭寺は、この外側に位置する。さらにその外側に一周約6キロのリンコル（ling-kor）が周回する。森田ら（1997）によると、現在のリンコルは17世紀のポタラ宮設置後に旧リンコルから拡大したもので、この巡礼路によってラサの仏教徒にとっての聖と俗が区分されるものであるという。

なお、旧リンコルに沿う位置に、大昭寺を守護する寺院が外側に向けて配置されていた。

(2) 政庁・行政庁

平泉においては、柳之御所遺跡が政庁・行政府である平泉館に比定されている。柳之御所遺跡は、延長約500メートルの堀によって区画された内部とその外側に大きく区分されるが、より中心的な機能は、堀内部地区に集約されていると考えられている。

現在まで残されているものはすべて地下に埋没した遺構であることから、全体として平泉館がどのような機能を有していたか明らかでない部分も多いが、堀内部においては、政治・行政的事務又は儀式を行う中心的建物、宝物等を納めたと考えられる倉庫、園池、井戸などで構成されていたと考えられる。中心的建物が複数棟で構成されていた可能性もあるものの、それらの機能差などについては検討途上である。仏教施設などの宗教施設についても不明な部分が多く、一説に、園池に対応して持仏堂があった可能性が指摘されている。仏教的色彩の強い出土遺物には、火舎、花瓶、木製宝塔、輪宝があり、そのほかに、呪符木簡などがある。

ラサにおけるポタラ宮は、大きく紅宮と白宮に区分され、中心的位置に配置される紅宮が聖なる空間、その両側の白宮が俗なる空間を構成する。紅宮には霊廟が付属し、代々のダライラマほか要人が祀られている。ポタラ宮は、チベットの神聖政治・祭政一致を示す構造物であるが、より中心的な建物である紅宮が宗教的色彩の強いものであることは、チベット支配における仏教の重要性を示している。

ポタラ宮は、ほぼ南面し、その名の示すとおり補陀落観音浄土そのものを表している。ポタラ宮の立地する丘陵は紅丘と呼ばれ、チベットを開化した観音菩薩の居所といわれている。その内部は、いくつもの仏殿に区画され、7世紀にスリランカからもたらされたとされる聖観音像ほか数々の仏像、尊像が祀られている。ラサにおいては神話的な開化伝説により、補陀落浄土が形成されていて、その浄土の領域を象徴するものがこの王宮である。

(3) 寺院

平泉においては、まず、古代から南北の境界として機能していた丘陵地に、山岳寺院である中尊寺が造営され、平泉の北を画している。その後、平泉の南西域に毛越寺と観自在王院が、さらに中央やや東寄りに無量光院が造営され、都市平泉の各域に寺院を核とする浄土空間が形成され、全域が浄土世界としての様相を呈している。

中尊寺は、霊廟である金色堂は阿弥陀堂でもあるが、「建立供養願文」に読まれる大池伽藍は釈迦如来を本尊とする。一方、『吾妻鏡』において「吾朝無双」と評された毛越寺は、構成する2大伽藍の円隆寺、嘉勝寺とも薬師如来を本尊としている。毛越寺に隣接する観自在王院は、基衡夫人によって建立されているが、阿弥陀如来を本尊とする。無量光院は背後の金鶏山とともに阿弥陀如来を本尊とし、極楽浄土世界を形成する。

このように、平泉では当主ごとに主要な寺院が要所に造営され、それぞれが浄土の形成において異なる機能を果たしている。また、それらの寺院は、それぞれ豊富な水を必要とする園池を有することから、都市計画上也十分な検討のうえで配置されたものであることは明らかである。

ラサにおいては、大昭寺と小昭寺が中心的寺院といえる。いずれもソンツエンガムボ王の妃によって吐蕃の草創時に建立された。それぞれ、チベットと唐からもたらされた釈迦如来が本尊として祀られた。

吐蕃草創期の説話に、チベットに仏教を広めるため、羅刹女の心臓にあたるオタンの湖を埋めて寺院を建てるように占われ、それによってこの2寺が建立されたとある。この湖の埋め立てに関して、ラサの地名が生まれたとする考え方もある。また、羅刹女の手足を抑えるために12の寺が建てられたと伝えられている。

このように、ラサ市内の寺院は、説話により当初の建国に関わるものとして説明される。しかも、大昭寺が、その後展開する巡礼路の中心として長く機能することとなり、もっとも外側の巡礼路リンコルが12の寺を結ぶものとして説明されることについては、平泉と内容の相違はあるものの、寺院が都市計画上重要な意義をもつという類似点を認めることができる。

(4) 霊廟

平泉においては、金色堂須弥壇の下に、金箔張りの木棺に納められた為政者3代の遺体と4代の首級がミイラとなって祀られている。金色堂はまた阿弥陀如来を本尊とする阿弥陀堂であり、1124(天治元)年に建立されたことが知られている。初代清衡の没年は1128(大治3)年であるが、金色堂が当初から葬堂を意図して建立されたものであったのか否かについては議論がある。3代はそれぞれ、中央壇、西南壇、西北壇に分け納められている。

平泉滅亡の折には、平泉館と金色堂との特別な位置関係が説明され、為政者と行政庁との密接な関係が示されている。

ラサにおいては、ポタラ宮の紅宮に歴代ダライラマの霊塔が築かれている。霊塔は高さ14.8メートルで、第1層(基層)から屋頂部に抜けている。チベット中興の祖ともいえる5世の霊塔が中央に配置されていて、13世まで全部で8基が構築され、それぞれの遺体が安置されている。仏殿と霊廟が一体化しているという点においては、金色堂と共通している。ポタラ宮は、当初、日常的空間としての白宮が建築され、後に聖なる空間である紅宮がつけられた。5世の霊塔は没後に作られているため、仏殿と霊廟の一体化は当初から企図されていた。

(5) 庭園

平泉においては、仏国土（浄土）を表すものとして ICOMOS より評価された浄土庭園と、邸宅に付属するなどのそれ以外の庭園とがある。

浄土庭園は、3代それぞれが建立した中尊寺、毛越寺、無量光院と、毛越寺に隣接する観自在王院に造営されている。浄土庭園は、仏堂・園池・背後の山が一体となって現世に浄土空間を形成しようとしているもので、仏堂の本尊は釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来などの種類がある。

その他の庭園としては、柳之御所遺跡で発掘された庭園が代表的である。奥州藤原氏の日常的機能は加羅御所が担い、政治・行政上の拠点である平泉館とは異なることが記録されているが、当初からその機能分化が行われていたかについては明らかとなっていない。仮に、当初は両機能が未分化であったとした場合、庭園の性格について日常的要素を考慮しておく必要がある。

ラサにおいては、主たる寺院である大昭寺及び小昭寺には庭園は造営されていない。また、ポタラ宮そのものは庭園を有しないが、ポタラ宮北側にあるルカン寺の東側に園池が造営されている。

離宮であるノルプリンカには、東西約 40 メートル、南北約 100 メートルの方形池が構築され、湖心亭と竜王亭の二つの建物を伴っている。それらは、ダライラマの休息空間であるとともに、応接空間としても利用された。為政者の安寧の空間であり、庭園そのものには浄土庭園のような宗教的色彩はない。

(6) 離宮

平泉における離宮について明確な存在は知られていないが、毛越寺の東に隣接する観自在王院跡は、阿弥陀堂が南面し、また、邸宅に付随するような形状の園池が確認されていることから、寺院として整備される以前に、離宮的な機能を有した場所だったのではないかとする見解がある。しかし、そのことを裏付ける具体的な史料はなく、それを証明するためには、今後の調査に待つべき部分が多い。

一方、『吾妻鏡』では、「加羅御所」を秀衡の「常御所」として「平泉館」と対応させている。奥州藤原氏の政務空間と日常空間が隣接しながらも分化していたことを示している。

ラサにおいては、ノルプリンカが離宮として長期間にわたり機能したことが知られている。ダライラマ 7 世が 1740 年に造営を開始したもので、当初は単なる避暑地の性格であったが、その後、毎年 4 月から 9 月までの間滞在し、政務に加え、儀式や宗教活動が行われた。

(7) 荘園

平泉においては、後世の記録によるものではあるが、初代清衡により、自らが発願した紺紙金銀字交書一切経の写経に関わり、骨寺村の領主であった蓮光に、中尊寺経蔵職が与えられている。以後、14 世紀後半ごろまで中尊寺の荘園として位置づけられることとなる。中尊寺に伝わる 2 枚の骨寺村荘園絵図は、骨寺村の領域を示したものと考えられている。

ラサにおいては、シガツエやギャンツエなどに、近年までダライラマの荘園があった。ギャンツエのバラ荘園はその代表である。当初の領主はブータンより亡命し、その後、ギャンツエの地方政府に関与した。20 世紀になり勢力を拡大し、長兄がダライラマの秘書となり、次兄が地方政府にあって荘園を拡大した。1959 年のダライラマ亡命以後も、バラ荘園は特別な意味を持つものとして、保護されてきている。

以上の概略を、表 3 にまとめる。

表3 12世紀の平泉とラサとの比較

	平 泉	ラ サ
時代	11世紀末から1189年 (約100年間)	17世紀半ば～20世紀半ば (約300年間、ポタラ宮造営以後)
宗教的背景	仏教(とくに、日本の時代背景によって展開した、独特の性質をもつ日本の仏教、浄土思想が中心)	仏教(チベット仏教、観音信仰、観音菩薩は建国神話により国土を救済、補陀落浄土)
政治と宗教との関係	為政者が宗教的施設を造営。宗教施設の運営に一定の役割。宗教に帰依。	祭政一致 (為政者は宗教の主宰者である)。
都市設計の基点・基軸	聖なる山である金鶏山と、金鶏山と宗教施設及び政治行政施設を結ぶ軸線。	建国説話における重要寺院である大昭寺
都市の規模・形状	東西南北約2キロ四方	長軸約2.5キロ、短軸約1キロの楕円形(旧0.7キロ×0.5キロ)
政治・行政拠点	当初に設置 (その後、寺院や都市設計)	再興時に設置 (中心的寺院を中心とした都市計画に組み込まれている)
寺院	都市の要所に順次計画的に配置。釈迦、薬師、阿弥陀それぞれの浄土を表現。	大昭寺が中心。大昭寺を守護する複数の寺院が巡礼路上に同心円状に配置される。
霊廟	寺院境内にある阿弥陀堂が霊廟と一体化。歴代の為政者が安置。	ポタラ宮紅宮内に諸仏とともに配置された霊塔内に、歴代の為政者が安置。
庭園	寺院に付随する庭園は浄土庭園。そのほか、行政施設もしくは邸宅に付随する庭園がある。	寺院庭園、離宮内庭園ともに、浄土庭園とは異なる性格。
離宮	現段階で、離宮として確実なものはない。	ノル布林カが夏季の離宮として、政治・行政・宗教的機能を担う。
荘園	寺院の荘園。経済基盤であると同時に、仏教經典との結びつきによる精神的意味を持つ。	為政者側近(行政官)の荘園。経済基盤としての機能が大きい。

6 まとめ

政治・行政上の拠点として繁栄した時代は大きく異なるが、ともに仏教を基調とする「浄土」の概念により領域の統治を図ったという点において、平泉とラサは共通している。

個々の項目別の類似点・相違点については、表3のとおりであるが、都市造営という観点においては、以下の点に留意しておく必要がある。

ア) 平泉では都市設計にあたり「浄土」が意識された。「浄土」は個別の阿弥陀堂のほか、主要な寺院・浄土庭園と金鶏山との関係において面的に具体化された。ラサにおいては、都市の中心は建国と密接な関わりを持つ釈迦如来が安置される寺院であり、「浄土」は構築されるものではなく、国土全体に及ぶ所与の概念である。

イ) 平泉では、中国都城に起源をもつ条坊に類した地割が行われている。その地割は金鶏山と寺院や政庁を結ぶ線を基準軸とし、鎮守社がその交点となる場合がある。ラサにおいては、中心寺院の本

尊釈迦如来を巡礼する同心の多角形・楕円形が街区を形成する。釈迦如来を守護する複数の寺院が、もっとも外側の巡礼路に配置されている。ラサの都市設計はポタラ宮造営以前からのもので、ポタラ宮の造営により、巡礼路が拡大された。

ウ) 平泉では、自然の独立小丘である金鶏山及び自然地形や豊富な湧水を生かした園池が、都市の設計上重要な役割を果たしている。ラサでは、ポタラ宮の設置される紅丘や薬王山は、一定の比高をもった自然の独立丘であるが、都市設計上の役割は薄く、むしろ仏教思想と直結しない建国神話の占める位置が大きい。

エ) 平泉では、為政者が主要寺院の荘園を設立し、寺院の経済基盤とする。ラサでは、行政官そのものの荘園が広がっている。

参考文献

- Chen Qingying 2005 "The System of the Dalai Lama Reincarnation" China Intercontinental Press, Beijing
- Tour in Xigaze Editorial Committee 1994 "Tour in Xigaze" New World Press, Beijing
- TudenGyaltzan, et. al, (ed.) 1996 "The Potala- holy palace in the snow land-" China Travel & Tourist Press, Beijing
- Wu Wei and GengYufang 2005 "Tibetan Literature" China Intercontinental Press, Beijing
- 多吉占堆、薛文献 (編著) 2001 『拉萨布达拉宫』 広東旅游出版社 (広州)
- 李 良義 2007 『チベット、チベット』 青海人民出版社 (西寧)
- 尼瑪次仁 2007 『大昭寺：拉萨的坛域』 西藏人民出版社 ラサ
- 森田一弥・布野修司 1997 「ラサの宗教施設の配置構成に関する研究：仏教寺院、巡礼路、モスクについて」『学術講演梗概集・F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題』 pp.647-648 日本建築学会
- 佐藤嘉広 2013 「平泉の「都市」計画と園池造営」『平泉文化の国際性と地域性』東アジア海域叢書第16巻 pp.167-188、汲古書院、東京
- 柳之御所遺跡調査事務所 2008 「柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷 (中間報告その4)」『平泉文化研究年報』8 pp.65-75



写真1 ポタラ宮 (南東から)



写真2 ポタラ宮 (券売所付近)



写真3 ポタラ宮 (北西、柳公園側から)



写真4 ポタラ宮 (南西、大昭寺から)

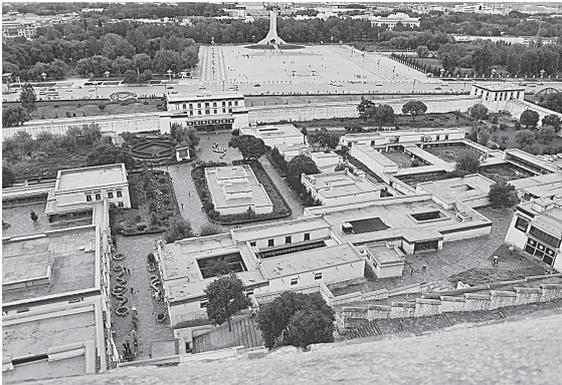


写真5 ポタラ宮から南 (旧ショル村)



写真6 ポタラ宮前から薬王山 (南西方向)



写真7 大昭寺 (北東から)



写真8 大昭寺入口付近 (北東から)



写真9 ノル布林カ (東から)



写真10 ノル布林カ (湖心亭)

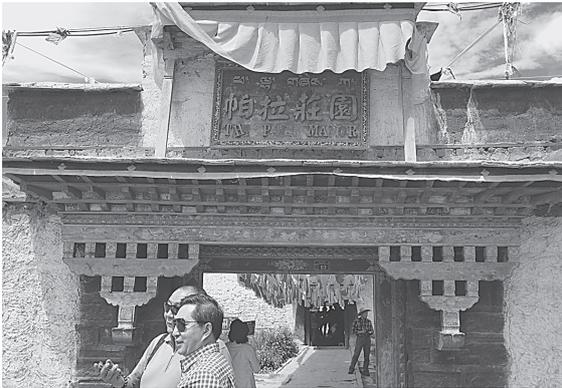


写真11 パラ莊園入口



写真12 パラ莊園入口内部



写真13 八廓街1



写真14 八廓街2



写真15 ルカン寺 (南東から)

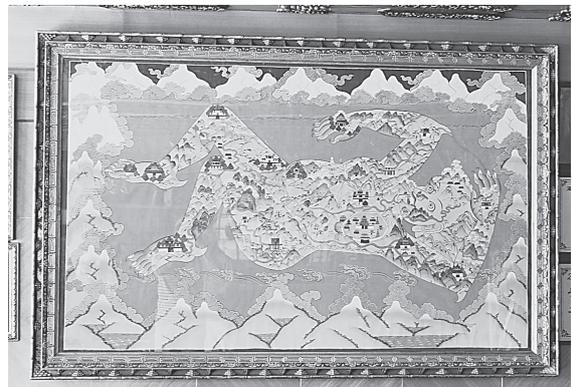


写真16 羅刹女 (ラサ建国神話)